

## 図書館の徹底活用術⑦

# 「対話」という経験を通じた学習支援 「行為の中の省察」の観点から

枝元 益祐

皆さんの学習支援の為に図書館の有用な活用方策の紹介をしています。皆さんの学習活動を拡張する拠点である図書館を有効に活用する為の窓口に於けるレファレンスサービスでの「対話」についてドナルド・ショーン (Donald A. Schön) の「行為の中の省察」という観点から前回には言及しましたが、今回はその続きとして更に考察を深めることで、図書館での学習支援の一端を紹介していきたいと思います。

「経験からの学び」にその焦点を当てながら、そういった経験の内実である省察的实践（振り返りや考察を伴い、それらを自己のものへと反映させるような実践の在り方）としての行為やそれに伴う対話のという経験の中からの学びが専門性を深めるということを強調しました。これを支えるものとして前回、以下のような3つの観点を挙げて説明しました。それらは、第一に「行為の中の知(knowing in action)」、第二に「行為の中の省察(reflection in action)」、第三に「状況との対話(conversation with situation)」です。

第一の「行為の中の知 (knowing in action)」ですが、これは「知」とは恰も人間の外側にありそれを誰かから伝達してもらうことを以って学びとする概念と対極的な学習観です。「知」とは人間の内側に経験として存在しておりそれを「行為 (action)」の中で醸成させて行くという学習観であり、ジョン・デューイが「なすことによって学ぶ (learning by doing)」といった概念を根底に持っています。これは人は誰でも経験を持っており、その経験こそが学びのリソースであるという生涯学習論の本質的な議論をその前提としています。

この点が、いわゆる知識伝達型教育とは異なった観点が端的に具現化しています。知識伝達型教育では、学習者は知識を持っておらず、故に知識を持っている教育者がその知識を伝達する、更にはその伝達の際の合理的な伝達方法も構築がなされるという特徴があります。人間を生得的にタブラ・ラーサ (tabula rasa) という精神的白紙の状態と見做し、そこに知識を注入するという教育観は様々な議論を招きました。例えば、福沢諭吉

はその著『文明教育論』の中で「学校は人に物を教へる所にあらず、唯其の天資の発達を妨げずして能く之を发育する為の具なり、教育の文字甚だ穩当ならず、宜しくこれを发育と称すべきなり」と記し、いわゆる知識伝達型教育を否定しました。また、石川啄木もその書簡集『林中書』において、日本の教育者は「貨幣製造者である。何故となれば、彼らは、人はその顔の違ふが如く心も同じでない事を忘れて」と同様の批判をしています。

とは云え、「ゼロからはゼロしか生まれない」ということも一方で世の中の純然たる事実です。何をどのように経験するのか、そしてそれをどのように形作っていくのかということが重要になります。その為に第二の「行為の中の省察 (reflection in action)」という振り返りによる省察が必要になります。Reflectionとは反射という意味ですが、メジロー (Mezirow) で云うところの「Self-Reflected Learning」のように、行為の中で新たに経験したことを自分自身へと反映していくこと、換言すると、経験した未知の事柄を既知の事柄と統合し新たな「知」を再構築することです。こういった一連のプロセスは人間の内側で起こる自己変革であり、外側にある「知」を系統化したカリキュラムやマニュアルでは導くことのできない内的成長です。

そして第三の「状況との対話 (conversation with situation)」ですが、上記のような自己変革の「状況」を自身の問題として受け止めることにより生成する当事者意識が非常に重要になります。

ここで、視座を図書館へと移したいのですが、今までみてきたように知識伝達型教育の場としてだけではない図書館（特にレファレンス・サービス）の活動は、正に自己変革の場であり、その為の学習支援の場であるということがきます。皆さんたちが普段、何気に受けている図書館のサービスは、実はこのような複雑な理念を背景として、利用者の皆さん個々の学習の「行為」や「状況」を把握し、そこに参画することで内的な「知」の醸成を支援するサービスだということの一端を紹介しました。

えだもと ますひろ (講師・図書館学・教育学)